

直線道路「久我くが躰たみ」

こがなわて久我躰は、平安京の朱雀大路の延長線である「鳥羽作り道」から山崎駅を結ぶ北東から南西方向の直線道路で、歴史地理学では、平安京造営時に造られたと推定されています。

久我躰が文献にはじめて現れるのは『徒然草』で、鎌倉時代のことです。『太平記』などにも見られます。応仁の乱のさなか、応仁元（1467）年に久我躰において、山名氏と細川氏が政権を争って合戦をしたのは有名な話です。また、秀吉が天下をとった大山崎の合戦でも、武士たちが久我躰のあたりで戦いを繰り広げました。

これらの記述では、久我躰は馬が足をとられるような田んぼの畦道でした。

大山崎町下しもうえのみなみ植野南遺跡内の調査で、「久我躰」を踏襲したと考えられている道路を130 mにわたって調査しました。平安時代前期にさかのぼる久我躰を確認できるものと期待されました。

調査では、平安時代後期には道路が敷設されていたことがわかりました。この段階では2本の溝に挟まれた幅10 mの道路であり、その上面はある時期に部分的に小石で舗装されていました。ぬかる

みを埋めたのか、重い荷物を運ぶために整地したのかもしれない。中世後半には畦道程度の狭い道路にかわっていました。

現在利用されている道も古代から踏襲されていることがわかりました。

（松尾史子）



発掘調査で見つかった久我躰（下植野南遺跡）